

リアリズムの戦争原因論

— 「戦争へのステップ」論からの批判—

Realism on the Causes of War:
A Critique from the Steps to War Theory

田 中 宏 明

現代の戦争の多くは国家間戦争ではない。さらに主要大国間の戦争もほぼ起きていない。それにもかかわらず、国際関係論や安全保障論は、国家間戦争、特に大国間の戦争に焦点を当ててきた。その理由は国際関係論や安全保障論においてだけでなく、戦争原因研究においてもリアリズムが大きな影響力をもってきたからである。リアリズムに従うことで戦争になる可能性が高まることを論証する。最初に国際関係論における主要なリアリズムとその戦争はどのようなものかを明らかにして、次に、実証的な戦争原因研究である「戦争へのステップ」論を参照しながら、リアリズムの戦争原因論を批判的に検証する。最後にリアリズムによる戦争への道に邁進しない方法を示唆する。

キーワード：戦争、戦争原因、古典的リアリズム、覇権的リアリズム、構造的リアリズム、攻撃的リアリズム、防御的リアリズム、新古典的リアリズム、「戦争へのステップ」

目 次

- I はじめに
- II リアリズムの戦争
 - 1 古典的リアリズム
 - 2 覇権的リアリズム
 - 3 構造的リアリズム
 - 4 攻撃的リアリズム
 - 5 防御的リアリズム
 - 6 新古典的リアリズム
- III 「戦争へのステップ」と戦争原因研究
 - 1 「戦争へのステップ」

- 2 領土問題
- 3 同盟形成
- 4 軍備競争
- 5 繰り返される危機

IV 批判的考察

I はじめに

現代の戦争の多くは国家間戦争ではない。19世紀以来国家間戦争の数は減少してきている。データに基づく実証主義的な戦争研究においてその傾向は明確である。たとえば、「戦争の相関研究」プロジェクトを主導してきたJ. デーヴィッド・シンガーらによれば、1816年から1997年までの180年間で、79の国家間戦争（inter-state wars）、214の内戦（civil wars）、そして108の国家外戦争（extra-state wars）があった。国家間戦争の数が最も少ないだけでなく、それはまた減少傾向にある¹⁾。ウプサラ紛争データプログラムやノルウェー平和研究所のデータでも、第二次世界大戦後の期間においても国家間戦争の数が最も少ない²⁾。冷戦後の武力紛争は、都市部で主に戦われる傾向があり、政治的犯罪的な暴力に大きく関係しており、民間人が大きな危険状態にある³⁾。ライモ・ヴァイリュネンによれば「今日、主要大国間の国際戦争は統計的にまれであり、そしておそらくすぐに時代遅れになる⁴⁾。」

現代の戦争の多数は、国家間戦争ではなく、主要大国間の戦争でもない。それにもかかわらず、国際関係論や安全保障論は、国家間戦争、特に大国間の戦争に焦点を当ててきた。その理由は国際関係論や安全保障論においてリアリズムが大きな影響力をもってきたからである。

現代を代表するリアリストのステューヴン・ウォルトは、国際関係論のパラダイムとして、リアリズムをリベラリズムとコンストラクティヴィズムとならぶ国際関係論のパラダイムとして提示した⁵⁾。しかしそれらは同列には位置づけられてはいない。彼は「リアリストの伝統の基本的な要素は、万有引力に等しい」と主張する。リアリズムの知的伝統とは、アナーキーにおけるいくつかの国家の存在が、各自の安全保障を問題のあるものにし、そして国家を権力あるいは安全をめぐる互いに競争するように仕向けるというものである。ネオリベラル制度主義はリアリスト理論のほとんどのコアな前提を採用している。コンストラクティヴィズムもアナーキーと競争が歴史的に結びついていることを時折認めてきた⁶⁾。リアリズムが国際関係研究の不動の前提としてみなされている。

新古典的リアリストのウィリアム・ウォルフォースは、「リアリズムに基づかない現代の安全保障研究を理解することは困難である」と主張する。なぜならば人間集団間の暴力と安全について今まで前進させてきた最も影響力のある諸理論の多くはリアリズムの知的伝統に属するからで

ある。そして多くの国でリアリズムは、対外政策の従事者が使用する語彙の標準的な要素となっているからである⁷⁾。

戦争原因研究においてもリアリズムの影響力が大きい。ジャック・レヴィとウィリアム・トンソンが指摘するように、「政治学における戦争原因の研究は、リアリスト諸理論によって伝統的に支配されてきた⁸⁾。」しかし、リアリズムの知的伝統やリアリスト諸理論に従えば、平和ではなく戦争となる可能性がある。ジョン・ヴァスケスによれば、「同盟形成、軍備増強、パワー・バランス、そしてリアルポリティーク戦術などのようなリアリストの共通の実践を採用することは、平和を生み出すのではなく、戦争に導く⁹⁾。」ヴァスケスらはそれを「戦争へのリアリストの道」¹⁰⁾と呼ぶ。つまり、リアリズムは現代の戦争のリアリティを直視しておらず、それどころかリアリズムに基づく対外政策が戦争の原因となりうるのである。

そこで、リアリズムは戦争をどのようにとらえてきたのか、そしてリアリズムに基づく対外政策がなぜ戦争の原因となるのかを、実証主義的な戦争原因の研究を参照しながら批判的に検討したい。最初に、リアリズムが戦争をどのようにとらえてきたのかを考えたい。ただしリアリズムといっても一概には言えず、さまざまなリアリズムがある。主要なリアリズムを取り上げそれぞれの戦争について考察する。次に、実証主義的な戦争原因研究の中で、ヴァスケスらの「戦争へのステップ」論に依拠しながら、戦争原因について考察し、リアリズムの戦争原因論の問題点を指摘する。最後に、「戦争へのリアリストの道」に邁進しない方法を示唆する。

II リアリズムの戦争

リアリズムの知的伝統は、トゥキディデス、マキャヴェリ、ホップズらのリアリズム思想に遡ることができる。古典的リアリズムとは、リアリズムの知的伝統を受け継ぎながらも、新たな学問としての国際関係論を打ち立てた一群の研究者によるものである。たとえば、E. H. カー、フレデリック・シューマン、ラインホルド・ニーバー、ハンス・モーゲンソー、ジョン・ハーツ、アーノルド・ウォルファーズらが古典的リアリストである¹¹⁾。そのなかでモーゲンソーのリアリズムが最も影響力を持ってきた。スタンリー・ホフマンはモーゲンソーを「リアリズムの創始者」¹²⁾と呼ぶ。モーゲンソーと対照的な古典的リアリストがカーである。モーゲンソーとカーのリアリズムの違いは、科学的方法論を用いるネオリアリズムにもおいても見いだすことができる。それはケネス・ウォルツの構造的リアリズムとロバート・ギルピンの覇権的リアリズム¹³⁾の違いにも反映されている。ネオリアリズムにおいて構造的リアリズムの影響が圧倒的に大きく、攻撃的リアリズム、防御的リアリズム、そして新古典的リアリズムが構造的リアリズムをめぐる議論を行ってきた。カーとモーゲンソーの古典的リアリズム、ネオリアリズムとしての覇権的リアリズムと構造的リアリズム、攻撃的リアリズム、防御的リアリズム、そして新古典的リアリズム¹⁴⁾のそ

それぞれのリアリズムの特徴とそれぞれの戦争に検討していく。

1 古典的リアリズム

古典的リアリズムを代表するモーゲンソーと最も対照的なリアリストが E. H. カーである。両者ともにリベラリズムを理想主義あるいはユートピアニズムとして批判し、権力政治の重要性を主張した点では共通する¹⁵⁾。両者の相違点は政治の捉え方にある。カーは政治を「ユートピアとリアリティ」の対立として理解し、その対立の妥協を考える¹⁶⁾。それに対して、モーゲンソーは政治を権力の世界と見なし、「権力の悪から免れない」¹⁷⁾という政治倫理を考える。さらに、両者の国際関係像が異なる。カーのそれが覇権国中心の国際秩序であるのに対して、モーゲンソーの国際関係像はおもにウェストファリア以降の主権国家システムである。この違いゆえに覇権国の位置づけが正反対となる。前者では覇権国は国際秩序の擁護者であるのに対して、後者において覇権国は国際システムの破壊者である。同様に、前者においては、イギリスは覇権国家であるのに対して、後者ではバランスラーとして位置づけされる。

カーの国際関係論は、大戦間期におけるイギリス中心の国際秩序の崩壊からいかに新たな国際秩序を回復させるかを問題にした。カーによれば、新しい国際秩序を構築するには、権力面では権力闘争に巻き込まれない軍事力、経済力、世論を支配する力からなる政治力をもつ覇権国家が必要である。道義の面でも覇権国に基づく国際道義秩序でなければならない。しかし、この国際秩序の受益者が非受益者に対して許容できるように譲歩する必要がある。国際秩序の擁護者たる覇権国がその挑戦者に妥協の方法を適用しなければならない。カーは、覇権国の力によって国際平和と自由主義的国際経済秩序というユートピアにリアリティを与えて妥協させられると考えた¹⁸⁾。権力でユートピアを実現しようとするカーをモーゲンソーは「権力のユートピアン」¹⁹⁾と批判した。「二十年の危機」において、受益者側のイギリスの覇権は衰退し、覇権を担えたアメリカはその役割を担わず、非受益者側のドイツとの妥協が成立しなかった。そして第二次世界戦争が開始された。

モーゲンソーのリアリズムは権力政治である。モーゲンソーは、政治を「すべての人間に共通する権力欲にねざす権力政治」²⁰⁾ととらえ、国内政治と対外政策とともに権力政治が通底していると考え。それゆえ、モーゲンソーは「政治とは、他のあらゆる政治と同様に、権力闘争である。国際政治の究極目標が何であれ、権力はつねに直接の目的である」²¹⁾と定義する。「力として定義される利益の概念」すなわち国益に基づいて政治家は行動し、観察者にとってそれは知的準則となる²²⁾。

モーゲンソーによれば、対外政策は、力の維持、力の増大、そして力の誇示という国内政治の基本的な三つのパターンに対応して、力の分布を維持することを目的とする「現状維持政策」、力関係の逆転を目的とする「帝国主義政策」(現状打破政策)、そして「威信政策」となる。力を求めようとする諸国家は、現状維持か現状打破をしようとして、それによって「勢力均衡」とい

う形態とその形態を保持することを目的とする政策を「必然的に」生み出す²³⁾。現状維持国と現状打破国が権力闘争を行う国際関係においては、勢力均衡は、対外政策の一つの選択肢ではなく、普遍的概念なのである。

勢力均衡の方法は天秤のたとえで説明される。すなわち、重い方の秤皿の重量を減らす方法は、競争相手を弱めたりあるいは弱めたままにしたりする「分割支配」である。軽い方の秤皿の重量を増やす方法には、「代償政策」、「軍備」、「同盟」がある。代償政策の代表例がポーランド分割である。オーストリア、プロイセン、ロシアのうち、いずれの一国が他国を排除してポーランドから領土を得ることは、勢力均衡をくつがえすことになるために、三国間の力の配分が同じになるようにポーランドを分割した。軍備は、勢力均衡の維持あるいは回復に努める場合の基本的な手段である。同盟は、自らの力に他国の力を加えたりあるいは敵対国から他国の力を引き離したりする政策である²⁴⁾。

モーゲンソーが勢力均衡を評価する点は、近代国際システムにおける一国による普遍的支配の阻止と近代国際システムを構成する国家の存立の確保である。「400余年にわたる歴史をつうじて、勢力均衡の政策は、いかなる国も普遍的支配を遂げることができないようにするという目的を達成してきた²⁵⁾。」1648年における三十年戦争の終結から18世紀末におけるポーランド分割までの間、「近代国際システムのすべてのメンバーの存立を確保することに成功した」²⁶⁾。「すべてのメンバー」を主要大国とであると理解すれば、力の均衡は、国際システムを構成する主要大国の存立のためである。そのためには国際システム全体を普遍的に支配しようとする国家に対抗し同盟が組めるように国際システムを多数国家システムにしておかねばならない。しかし、一国による普遍的支配は、戦争を賭けてのみ阻止されてきた。そのような戦争は、1648年から1815年まで事実上絶え間なく続き、20世紀においては二度も全世界を巻き込んだ。「近代国際システムの誕生以来戦われてきた戦争のほとんどが勢力均衡のなかで起こっている²⁷⁾。」現状維持国と帝国主義国が対抗する勢力均衡において戦争は主要大国が存立するために取られる対外政策の手段である。

モーゲンソーによれば、そもそも勢力均衡が成り立つには「道徳的コンセンサスの拘束力」と「近代国際システムの道徳的コンセンサス」が必要なのである²⁸⁾。こうした勢力均衡の土台の実体が「貴族インターナショナリズム」であり、それがナショナリズムによって喪失した²⁹⁾。さらに、現代の国際システムには数か国の大国が併存する多極システムが安定するための条件が整っていない。その条件がそろえば、ホフマンのいう「安定システム」となる。安定システムが成り立つ条件とは、3か国以上の主要国、主要国間の相対的均衡、そして主要国が決定的に衝突しないで拡張できるはけ口となる地域があることである。これらの条件を失っているシステムが「革命システム」である。冷戦時代の国際関係とは、モーゲンソーにとって革命システムであり、双極不安定システムである。第一に、大国の数が減少し、米ソ2か国となり、勢力均衡システムが柔軟性を欠く二極になったことである。第二に、米ソの出現とイギリスの力の凋落によってイギリスが

バランスではなくなったことである。第三に、植民地の独立により大国の勢力均衡の機能のほけ口がなくなったことである³⁰⁾。

モーゲンソーは、革命システムにおいても対外政策の重要性を主張する。対外政策の目的とは「相手側の心を変えることで自国の利益の増進をはかること」であり、その手段が外交、軍事力、そして宣伝である。外交とは、相手に対して利益を満足させてやるとか、不利にするとかの形で、約束や威嚇がもつ説得力を利用しようとするものである。軍事力はある利益を追求しようとする敵対者の能力に対して、実際の暴力という物理的な衝撃を与えるものである。そして宣伝とは、味方の利益を支持するような知的信念、道徳的評価、感情的嗜好をつくりだし、それを利用しようとするものである³¹⁾。さらに、外交と戦争の目的が異なる。戦争の目的は、「敵の意思を打ち砕く」という絶対的なものであるのに対して、外交の目的は、絶対的な勝利も敗北も回避し、交渉による妥協という中間領域で相手側と接触することである。外交は「国益を節度をもって推進し、交渉による解決という形で妥協する道をあけてくこと」である³²⁾。外交交渉は、平和的には行われるが、約束や威嚇という「アメとムチ」による暴力を伴わない権力政治の手法である。

2 覇権的リアリズム

ギルピンのネオリアリズムは覇権的リアリズムの代表例である。覇権的リアリズムの基本的な考えは、第一に覇権と権力闘争の循環、そして第二に覇権国のパワーによってその循環を一時的にでも止める国際秩序の樹立というカーのリアリズムに起源がある。後者の覇権国による国際秩序の構築と維持を問題にするのが「覇権安定論理論」³³⁾である。ここでは前者の主題である覇権戦争に焦点を当てる。

ギルピンは、「国際関係はアナキーな状態における独立したアクター間で富と力をめぐって繰り返し発生する闘争である」³⁴⁾ととらえ、国際政治変動を問題にする。彼は国際政治変動を、「システム変動」、「システムミック変動」、「相互作用変動」の3タイプに分類する。システム変動とは、国際システム自体の主要な変動を意味する。古代ギリシャの都市国家システムの盛衰、中世ヨーロッパの国家システムの衰退、そして近代ヨーロッパの国民国家の出現はシステム変動の例である。国際システムにおけるシステムミック変動とは、国際システムの統治形態における変動である。システムミック変動の焦点は、特定の国際システムを統治する主要国家あるいは帝国の盛衰に当てられる。相互作用変動とは、国際システムにおけるアクター間の政治経済その他の相互作用における修正を意味する³⁵⁾。

覇権的リアリズムが問題にする戦争が覇権戦争であり、それはシステムミック変動に伴う戦争である。国家が行う費用便益計算によって次のような国際政治変動が起こる。第一に、国際システムを変えることにどの国家も利益を見いださないならば、国際システムは安定的である。第二に、期待される利益が予想される費用を上回れば、ある国家は国際システムを変えようとする。この国家は修正主義国家である。第三に、さらなる変化の限界費用が限界利益と同じかあるいはそれ

よりを上回るまで、ある国家は領土的、政治的、経済的な拡張によって国際システムの変化を求める。第四に、さらなる変化や拡張の費用便益間の均衡がひとたび達成されると、現状維持国の経済的費用が現状を支えるための経済的能力以上に急速に上昇する傾向がある。第五に、国際システムにおける均衡が解決されなければ、国際システムが変動させられ、そしてパワーの再分配を反映する新たな均衡が確立される³⁶⁾。

国際システムの構造とパワーの再分配の不均衡を解決する主要な手段が覇権戦争である。覇権戦争の特徴は、国際システムにおける支配的な国家(群)と勃興する挑戦者(群)との直接的な闘いである。覇権戦争は無制限な対立となりうる。そしてそれは使用される無制限な手段と国際システム全体を含むまで拡大する傾向がある。歴史的事例として、アテネとスパルタのペロポネソス戦争、三十年戦争、ルイ 14 世の戦争、フランス革命とナポレオンの戦争、第一次世界大戦と第二次世界大戦があげられる。それらはシステムにおける統治をめぐる戦争である³⁷⁾。

覇権戦争の例としてペロポネソス戦争を取り上げると、トゥキディデスは、ペロポネソス戦争の真の原因をパワーが成長するアテネと衰退するスパルタとの不均衡に見いだした。そしてスパルタ人がそのように認識した。「時がスパルタ人に不利に動き、アテネ人に有利に動いているとスパルタ人が信じ始めたとき臨界点に達した。」現実にアテネのパワーは戦争の勃発によってすでに頂点に達し、そして衰退し始めていたかもしれないが、この状況の現実にはスパルタ人には重要ではなかった。なぜならば、スパルタ人はアテネ人が強力になると信じたからである。スパルタ人が決断を迫られたのは、戦争を始めるかどうかよりも、いつ戦争をはじめるかであった³⁸⁾。ペロポネソス戦争は古代ギリシャの都市国家システムにおけるシステム変動に伴う覇権戦争だが、覇権戦争は国際システムにおいても同様に起こりうる。ギルピンによれば、「覇権戦争は(不幸にも)ずっと国際システムの進展とダイナミックスの機能的不可欠な部分である³⁹⁾。」

3 構造的リアリズム

ネオリアリズムを代表するのが、ウォルツの構造的リアリズムである。ウォルツは、戦争の原因を3つのイメージに整理した。第一イメージが人間の本性と行動、第二イメージが国家の構造、そして第三イメージが国際システムである。モーゲンソーはニーバーと同様に代表的な第一イメージのリアリストに位置づけられている⁴⁰⁾。ウォルツは第三イメージに着目する。なぜならば、「戦争の再発は国際システムの構造によって説明される」⁴¹⁾からである。

ウォルツは厳格な国際政治理論構築をした。それが国際政治システムの理論である。それによると、システムとは構造と相互作用する単位からなる。構造は全体としてシステムを考えさせるシステム・ワイドの構成要素である。国際政治構造は次の3つの点から理解される。第一に、国際政治構造はアナキーである。「自助は必然的にアナキーな秩序における行為原則である。」第二に、国際政治構造は主要なアクターである大国によって定義される。第三に、国際政治構造の能力の分布は大国の分布によって理解される⁴²⁾。

国際政治構造の観点から勢力均衡が説明される。まず、国家についての仮定として、国家は、最小限自己保存を求め、最大限普遍的支配に向かおうとする統一的アクターであると仮定される。国家あるいは国家のために行動する者は、考慮に入れた目標を達成するために利用可能な手段をおおよそ賢明な方法で用いる⁴³⁾。

国家の目標とは、モーゲンソーのリアリズムでは「国際政治の究極目標が何であれ、権力はつねに直接の目的」であるのに対して、ウォルツは、権力は目的ではなく手段であり、「アナーキーにおいては安全保障が最高次の目標」であり、安全保障とは生き残ることである⁴⁴⁾。そして国家が利用する手段には、「内的努力」と「外的努力」がある。「内的努力」とは、経済力の向上、軍事力の増進、巧妙な戦略の開発である。「外的努力」とは、味方の同盟の強化・拡大、敵の同盟の弱体化・縮小化である⁴⁵⁾。

ウォルツは、勢力均衡システムには、3かそれ以上の数のプレイヤーがいる必要はなく、2大国システムにおいても均衡の政治は持続すると主張する。2大国システムの場合、初期の対外不均衡を是正するのは、主に対内的努力の強化である。これが成り立つには、2か国以上の国家が自助システムに共存し、弱体化する国家を助けるような上位機関が存在しないという条件が付加される。自助システムとは、自ら助けられないもの、あるいは他者に比べて非効果的なかたちでしか自らを助けることができないものは繁栄できず、危険に身をさらして苦しむシステムである。そのような望まれざる結果の恐怖から、勢力均衡が生じるようなかたちで行動するように国家は促される⁴⁶⁾。この勢力均衡理論においては、国家行動の目的かどうかにかかわらず国家は、勝ち馬に乗るバンドワゴニングではなく、balancing行動をとると予測される。そしてシステムのなかの均衡への向かう強い傾向も予測される⁴⁷⁾。

米ソの双極システムは、モーゲンソーのリアリズムにおいては革命システムであるが、ウォルツの構造的リアリズムでは逆に安定システムである。多極システムでは、同盟関係は柔軟ではあるが、同盟の団結を必要とするために、戦略は硬直的であり、決定の自由は制限される。しかしながら、3か国以上の国家があると、同盟の柔軟性によって、友好と敵対の関係が流動的なままであるために、現在および将来の力関係についての予測が不確実になる。不確実性と誤算が戦争の原因となる。双極の世界においては、不確実性は少なく、計算は容易である⁴⁸⁾。それゆえ、双極安定システムは戦争の可能性が低い。それに対して、多極システムでは、モーゲンソーのリアリズムでもウォルツの構造的リアリズムでも、戦争が起こる可能性が高い。

4 攻撃的リアリズム

ジョン・ミアシャイマーは、カー、モーゲンソー、そしてウォルツを「リアリストの巨人」⁴⁹⁾として評価する。そのなかで、ミアシャイマーは、モーゲンソーの権力政治とウォルツのアナーキーという国際政治構造概念を引き継ぎながら、独自の概念を導入して彼らのリアリズムを批判し、自らの攻撃的リアリズムを構築した。

攻撃的リアリズムは、モーゲンソーのリアリズムを「人間の本性リアリズム」と呼び、それに従うと、大国は容赦なくパワーを追求することになると見なす。しかし、攻撃的リアリズムは、人間の本性リアリズムのように、国家が攻撃的パーソナリティを自然に備えているという考えには与しない。攻撃的リアリズムは、構造的リアリズムと同様に、国際政治の構造理論である。すなわち、大国の主な関心は、大国間関係から守るエージェンシーがない世界ではいかに生き残るかという問題を解決することである。パワーが生き残りの鍵となる。しかし、構造的リアリズムによれば、国際構造が国家にパワーをさらに増強させるインセンティブをほとんど与えない。それは現存の勢力均衡を維持するように国家を強いる。パワーを増やすよりも保持する方が国家の主目標なのである。構造的リアリズムは現状維持的なのである。攻撃的リアリズムは、世界政治において現状維持国家をほぼ見いだせないとの立場を取る。なぜならば、国際システムは国家にライバルを犠牲にしてパワーを得る機会を探し、そして便益が費用を上回るときこの状況を利用するという強力なインセンティブを生み出すからである。「国家の究極の目標はシステムにおいて覇権国になることである。」それが現実できはなくとも、大国にとって現状維持という選択肢はありえないのである⁵⁰⁾。

では、なぜ大国はパワーを求めて互いに競い合いそして覇権を争うのか。この問いについてミアシャイマーは次の5つの仮定から答える。第一に、国際システムはアナキー的であるということである。ウォルツに従って、アナキーとは国際システムの秩序原理と定義される。すなわち、国際システムは独立国家を超える中央機関をもたない独立国家から構成されるシステムである。第二に、大国は攻撃的な軍事的能力を本質的に持っている。それが大国どうして互いに傷つけそして可能であれば破壊する手段を大国に与える。国家は互いに潜在的に危険なのである。第三に、国家は他国の意図について決して確実であることはできない。いかなる国家も他国が攻撃的軍事能力を使って攻撃しないということに確証はない。国家のすべてが温和かもしれないが、この判断を確かめることは不可能である。さらに意図は急に変化することがありえる。意図の不確実性は避けられない。第四に、生き残りは大国の最上位の目標である。特に、国家は領土保全と国内政治秩序の自律の維持を求める。生き残りが他の動機を支配する。なぜなら、ひとたび征服されるならば、他の目的を達成する立場ではいられなくなるからである。第五に、大国は合理的なアクターである。大国はその対外環境を意識しそしてそこにおいていかに生き残るかについて戦略的に考える。特に、大国は他国の選好を考え、そして自国の行動が他国の行動にいかに影響を及ぼしうるか、そして他国の行動が生き残りのための自国の戦略にいかに影響しうるかを考える。これら5つの仮定がいっしょになると、大国が互いに攻撃的に考え行動する強力なインセンティブを生み出す。結果として、恐怖、自助、パワーの極大化という3つの明確な優位性をもって全世界を支配するパターンを生む⁵¹⁾。大国は自助の世界で互いに恐怖に怯えるがゆえに、パワーを極大化しようとして、大国は覇権を争わざるをえない。

覇権国は、核の明確な優位性をもって全世界を支配する「グローバル覇権国」と特定の地理的

な領域を支配する「地域覇権国」に区別される。攻撃的リアリズムにおける大国の究極の目標は、グローバル覇権国の立場を達成することである。しかし、現実にはそれを達成することは不可能である。現実的な目標は、世界で唯一の地域覇権国となることである。地域覇権国は現状のパワー分布を維持しようとする。地域覇権国 A の地域とは別の地域で地域覇権国 B が登場すると、A 国は現状を脅かす B 国の国力を弱め、あわよくば破滅させようとする行動をするようになる。地域覇権国 A にとって望ましいのは、A の地域以外で、2 か国以上の大国が対峙したり、潜在的覇権国が登場しそうになるとそれと同じ地域の大国が潜在的覇権国を封じ込めたりする場合である。アメリカは近代史において唯一地域覇権を達成した大国であり、潜在的覇権国であった帝国日本やナチス・ドイツ、ソ連に対してオフショア・バランスーとして適切な処置を行ってきた⁵²⁾。

攻撃的リアリズムでも勢力均衡が重視される。それによると、勢力均衡を自国に有利に変える戦略と、他国が勢力均衡を自国に不利に変えるのを防ぐ戦略がある。前者には 4 つの戦略がある。第一は戦争である。他国の征服はいまだに国家のパワーを効果的に獲得することができる。第二に、軍事力で威嚇する「ブラックメール」(blackmail)、第三に、ライバルに長期の紛争に関与させ国力を浪費させる「誘導出血」(bait and bleed)、第四に、ライバルが力尽きるまで戦うように仕向ける「流血」(bloodletting) である⁵³⁾。

後者には、ライバルが勢力均衡を覆そうとするのを防ぐバランスングと、侵略的な国家に対して他国に抑止する重荷を背負わせる「バック・パッシング」(buck-passing) という 2 つの戦略がある。バランスングには、第一は勢力均衡を維持する決意を外交チャンネルで伝えること、第二は同盟結成による外的バランスング、第三は防衛費の増額や徴兵制の実施という国力による内的バランスングである⁵⁴⁾。

バック・パッシングにおいては、バック・パッシングをする側がバック・パッサーであり、バック・パッシングされる側がバック・キャッチャーとなる。脅された国家にはバック・パッシングを促進する 4 つの方策がある。第一に、侵略国とよい外交関係を求め、バック・キャッチャーと目される国家に侵略国の注意を集中させる。第二は、バック・キャッチャーとは冷たい関係を維持することである。第三に、自国の防衛を強化して、侵略国にバック・キャッチャーに注意を向けさせる。第四は、バック・キャッチャーのパワーの成長を促進することである。これはバック・キャッチャーが侵略国を封じ込めるよいチャンスとなりうる⁵⁵⁾。これら 2 つの戦略のうち、バック・パッシングがバランスングよりも好まれる。バック・パッサーは、抑止が失敗しても侵略国と戦う必要がないからである。侵略国とバック・キャッチャーが長期のコストのかかる戦争にはまり込めば、バック・パッサーはパワーを得ることさえもある⁵⁶⁾。

このような危険な敵対者からの脅威を受ける国家が採用する戦略としてバランスングとバック・パッシングが推奨される一方で、宥和とバンドワゴニング戦略の採用は否定される。なぜならば、これらの戦略は、侵略国にパワーを譲るように要求するものであり、それは勢力均衡の論理を侵害しそしてこれらの戦略を採用する国家に危険を増大させるからである。生き残りに関心がある

大国は、その敵対国に宥和もバンドワゴニングもすべきではないのである⁵⁷⁾。

攻撃的リアリズムでは戦争は勢力均衡を自国に有利に変える戦略である。それはモーゲンソーのリアリズムにおける戦争のように勢力均衡を安定にする手段である。ただし、分割支配や代償政策については勢力均衡政策とはしていない。モーゲンソーのリアリズムにおける多極安定とは異なり、攻撃的リアリズムでは国際システムが双極システムであれば構造的リアリズムのそれと同様に内的バランスによって勢力均衡が保たれる。攻撃的リアリズムは構造的リアリズムにしたがって、戦争は国際システムの構造によって説明される。「国際的アナキーは国家に戦争を戦わせる鍵となる構造的要因」である。さらに、双極かあるいは多極かという「国際システムにおける主要国家間のパワーの分布」によって戦争の原因が説明される⁵⁸⁾。

こうした観点から、「バランスがとれている双極システム」、「バランスがとれていない双極システム」、「バランスがとれている多極システム」、「バランスがとれていない多極システム」という4つの国際システムと戦争の関連性が考察される。第一に、「バランスのとれない双極構造」は近代の歴史に存在せず、大国が2つになる前に強い国家が弱い国家を征服するか、弱い国家が降伏するからである。第二に、「バランスのとれた二極構造」では、二国はほぼ同等な力をもっているか、一方が決定的に強力ではないために、この大国間で戦争は起こりにくい。第三に、「バランスのとれない多極構造」では誤算が多く、大国を巻き込む紛争が多くなる。特に、潜在的覇権国が存在しているシステムでは、それが弱いライバル国に勝つ可能性が高いために戦争を起こす。潜在的覇権国に恐怖を抱き多くの大国がバランス同盟を形成し、それに潜在的な覇権国が恐怖を抱くという「恐怖のスパイラル」が戦争を招来させる。第四に、「バランスのとれた多極構造」は、バランスのとれない多極構造より戦争の可能性は低いが、双極構造と比べ、戦争を発生させやすい。第一の理由は、大国間競争が起きやすいからである。ただし、すべての大国が同時に戦争に巻き込まれる機会は多くはない。第二の理由は、大国間のパワーが不均衡になるために戦争は起こりやすい。第三の理由は、誤算が生じやすいために戦争の可能性はあるが、バランスのとれない多極構造のような大国間で恐怖のレベルが高まることは少ない⁵⁹⁾。バランスのとれない双極を除いて、バランスのとれない多極構において戦争が起こる可能性が最も高く、次にバランスのとれた多極構造において戦争が起こりやすく、バランスのとれた二極構造において戦争が起こりにくい。

5 防御的リアリズム

ロバート・ジャーヴィス、チャールズ・クレザー、スティーヴン・ヴァン・イヴェラらが代表的な防御的リアリストである。ジャーヴィスの研究に見られるように「リアリズムの継続的妥当性」⁶⁰⁾を認めながら、心理学、経済学、ゲーム理論などの方法を用いて国家間の協力の可能性を探究する点に防御的リアリズムの特徴がある。しかしながら、リアリズムといっても、ジャーヴィスは、モーゲンソーやニーバーのように権力競争を人間の本能として見るのではなく、ハー

ツやウォルファーズの古典的リアリズムを受け継ぎ、「安全保障のディレンマ」をアナーキーな国際治の本質とみる⁶¹⁾。さらに、防衛的リアリズムは、構造的リアリズムと異なるだけではなく、攻撃的リアリズムとは著しい対照をなす。

ジャーヴィスによれば、「国際的な主権の欠如は、戦争の発生を許容するだけではなく、現状に満足する諸国家がその共通利益があると認める目標を達成することを困難にさせる。」アナーキーにおいては、他者が協力すれば相互に報酬をもたらす協力政策は、他者が協力しなければ、大惨事を招くかもしれないのである。これが政府のある国内政治とは異なる国際政治である。国際政治においては国家が安全を得ることが他国を不注意にも脅すことにもなりえる。それが「安全保障のディレンマ」であり、それは「国家がその安全を増そうとする多くの手段は他国の安全を減らす」⁶²⁾と定義される。

戦争のコストと協力の報酬が高ければ安全保障のディレンマのインパクトは改善する。しかしながら、そうならないことがゲーム理論の「鹿狩りゲーム」や「囚人のジレンマ」で説明される。しかし安全保障のディレンマがあることは重要である。それを理解しないと、最終的に戦争に至らなくとも激しい紛争関係になりうるからである。すなわち、軍事力の増強がつねに安全の増強につながるという信念は、安全への唯一の方法が軍事力によって得られるという信念と結びつく。その結果として、懐柔的な態勢の採用、他国がもつ正統な不満への対応、あるいは協力からの相互報酬の発展という広範な改善につながる政策が軽視される。他方で、安全保障のディレンマへの感受性を高めすぎると、国家は侵略国をまるで現状の不安な擁護者であるかのように扱う可能性がある⁶³⁾。

さらに、安全保障のディレンマの考察に「攻撃・防御バランス」と「攻撃的兵器と防衛的兵器の識別」という2つの変数が加えられる。すなわち、それらは、攻撃と防御のどちらが有利かという攻撃・防御バランスの問題であり、そして攻撃的兵器と防衛的兵器が識別できるかという問題でもある。第一に、攻撃が有利のとき、他国の軍隊を破壊することはたやすく、自国の領土を守るよりもその領土を取る方がたやすい。防御が有利なときには、前進し破壊し取るよりも守り保持する方がたやすい。攻撃が有利の場合に安全保障のディレンマを深めることになる。現状維持国は侵略国のように行動しなければならないからである。逆に、防御が有利であるときには、現状維持国は他国をひどく危険にすることなく自国を安全にすることができる。防御の有利さだけが安全保障のディレンマを改善することができる。第二に、国家を守る兵器や政策が攻撃能力を提供するかどうかで安全保障のディレンマが強く作用するかどうかに影響を与える。領土を保つために最も効率的な武力と領土をとるために最適に設計された武力とを分けることは必ずしも可能ではない。しかし、このような区分が可能であるならば、安全保障のディレンマの中心的な特徴はもはや有効ではなく、そしてアナーキーの面倒な帰結が取り除かれる⁶⁴⁾。

このように国際関係がアナーキーであるがゆえに戦争が発生し、安全保障のディレンマが戦争を誘発する可能性がある。さらに攻撃が有利であり、攻撃的兵器と防衛的兵器の識別が困難であ

れば、安全保障のディレンマが悪化する。しかし、防御的リアリズムのなかでも安全保障のディレンマに関する批判がある。たとえば、クレーザーは、敵対国が安全以外のものを求める「貪欲国家」であれば、安全保障のディレンマが問題になるのではなく、目標が両立しない国家間の競争と紛争が問題になると指摘する⁶⁵⁾。ヴァン・イヴェラは、安全保障のディレンマから戦争の原因が生じるのではなく、攻撃・防御バランスにおいて征服が容易なときに戦争は起きやすいと批判する⁶⁶⁾。

防御的リアリズムのなかで見解の相違があるとしても、防御的リアリズムと他の構造的リアリズムや攻撃的リアリズムとの相違点の方が大きい。ジャーヴィスは、ウォルツと同様に、国家の目標を安全保障と仮定し、国際関係をアナキーととらえる。構造的リアリズムではアナキーは国際政治構造として国家に競争を強いるが、防御的リアリズムはアナキーにおいても協力の可能性を見いだす。相対的なパワーを極大化する大国間では目標の両立はありえないという攻撃的リアリズムの主張は、防御的リアリズムとは相容れない。確かに拡張主義国に直面するという状況に遭えば、防御的リアリズムの分析は攻撃的リアリズムのそれと同様なものになる⁶⁷⁾。しかし、拡張主義的ではない相手国に攻撃的になれば、安全保障のディレンマになる。大国であっても、アメリカ、西欧、日本という先進国間には安全保障共同体が形成されており、国際レベルでのダイナミクス、すなわち、恐怖、紛争、ライバル関係という通常の軌道がこうした主要国間で戦争を生み出すとは考えがたい。「その共同体はそこにその破壊の種をもたない」という主張に防御的リアリズムの特徴がある⁶⁸⁾。防御的リアリズムは、他のリアリズムと同様にアナキーに戦争要因があると考えるが、安全保障のディレンマが悪化し、攻撃が優位で、攻撃的兵器を増強していけば、戦争を引き起こす可能性が高くなると主張する。

6 新古典的リアリズム

ギデオン・ローズは、トマス・クリステンセン、ランドル・シュウェラー、ウィリアム・ウォルフォース、フェリード・ザカリアらの一連の研究を新古典的リアリズムと命名した⁶⁹⁾。新古典的リアリズムは、ウォルフォースのようにギルピンの覇権的リアリズムを高く評価するものもあるが⁷⁰⁾、その議論の矛先はウォルツの構造的リアリズムに向けられる。ローズが問題にしたのは、ウォルツの国際政治の理論が国家の相互作用の結果を説明しても、個々の国家の行動を説明する対外政策の理論構築を企図するものではない点である。新古典的リアリズムは、構造的リアリズムにしたがって、国家の対外政策の範囲と野心が国際システムおけるその場所によって駆り立てられ、特にその相対的な物的なパワーの能力によって何よりもまず駆り立てられると理解する。しかしながら、新古典的リアリズムからすると、対外政策へのそのようなパワーの能力のインパクトは間接的でありそして複雑なのである。なぜならば、システムの圧力は国家という単位レベルで媒介変数によって翻訳されなければならないからである。対外政策の選択は、現実の政治リーダーやエリートによって作られ、そして問題となるのはその相対的なパワーの認識なのである。

新古典的リアリズムは、古典的リアリスト思想から引き出された洞察を更新し体系化することで、対外変数と対内変数の両方を組み込む⁷¹⁾。

シュウェラーは、ウォルツの構造的リアリズムと古典的リアリズムを批判的に継承する新古典的リアリストである。シュウェラーは、国際システムの構造、そして主要国の同盟のパターンと対外政策の戦略という新古典的リアリズムの観点から第二次世界大戦を考察している。シュウェラーはウォルツのように能力の分布（大国の分布）によって国際システムをとらえるが、大国をさらに「極」と「準大国」に分ける。そしてシュウェラーはウォルツには「現状維持バイアス」があると批判する。現状維持バイアスとは、満足した既存の国家のレンズを通してのみ世界を見ることである。シュウェラーは、モーゲンソー、シューマン、カーらの古典的リアリストが国家を現状維持的か現状打破的に分けたように、安全を極大化する現状維持国とパワーを極大化する現状打破国に分ける。第二次世界大戦前の主要大国のうち、ソ連、アメリカ、ドイツが極であり、イギリス、日本、フランス、イタリアが準大国であった。そしてソ連、ドイツ、日本、イタリアが現状打破国であり、アメリカ、イギリス、フランスが現状維持国であった。第二次世界大戦前の国際システムは、ソ連、アメリカ、ドイツという三極であり、しかもそれは、現状打破国の独ソと現状維持国のアメリカからなる不安定なシステムだった⁷²⁾。

シュウェラーは、同盟を形成する理由について、現状維持国あるいは満足国と、現状打破国あるいは不満足国とは異なると指摘する。前者は損失を最小限にしようとする。同盟は脅威に対する反応である。後者は利得を求めようとする。同盟は利益のための知覚された機会への反応である⁷³⁾。

最初に、脅威への反応として国家が追求する6つの戦略がある。最初の3つが同盟形成を含み、残り3つが連携に代わる選択肢である。第一に、紛争においてより強くあるいはより脅してくる側に対抗する「バランスング」、第二に、より強い同盟に参加することを意味する「バンドワゴニング」、第三に、同盟自体のなかでパートナーの行動を規制あるいは管理する「拘束」である。第四が「距離を取る」ことである。脅された現状維持国はその力を結合しても侵略国を抑止あるいは敗北させるには不十分であるときに互いに同盟しない。直接脅威を受けていない国家は、直に脅威を受けている国家との外交的軍事戦略の協調を拒否することで、その国家から距離を取る。第五に、脅された国家が他国のバランスング努力にただ乗りしようとする「バック・パッシング」(責任転嫁)である。第六が「エンゲイジメント」政策である。それは勃興する不満な国家の正統な利益を調整しようとすることで平和的な修正を行うことを意味する。エンゲイジメント政策は宥和政策でもあるが、確立した秩序を不満な国家に受け入れさせる社会化の試みでもある⁷⁴⁾。

次に、利得を求めようとする機会に反応する戦略がある。それらはバンドワゴニングによる利得を求める戦略である。シュウェラーは他の研究者とは異なり、バンドワゴニングに関してプラスの面があることを主張する。すなわち、ウォルツによるとバランスングが通常の行動であってバンドワゴニングは通常の行動ではない。ミアシャイマーはバンドワゴニング戦略を否定する。

さらにウォルトは、その脅威の均衡理論において、優勢な脅威に対して他国と同盟するバランスと、強者という危険の源に屈服するバンドワゴニングとを対照的に描く⁷⁵⁾。シュウェラーは、バンドワゴニングには否定されるマイナス面だけではなく、利益を得る見通しに動機づけられたプラスの面があることを指摘する⁷⁶⁾。

その第一が「ジャッカル・バンドワゴニング」である。この目的は利益であり、特に修正主義国が勝利の分け前にあずかるためにバンドワゴニングする。ライオンがジャッカルを引き付けるように、強力な修正主義国あるいは同盟が機会主義的な修正主義国を引き付ける。第二に、戦争の結果がすでに決まったときにバンドワゴニングに基づく「漁夫の利」が起こる。国家は戦利品の不労の分け前を要求するために、勝者とバンドワゴニングする。第三に、冷戦中に多くの途上国が共産主義に魅了された「未来への波」というバンドワゴニングである。ソ連・中国ブロックの参加に利益があると考えられたからである。第四は「感染あるいはドミノ効果」である。冷戦中にアメリカは共産主義の封じ込めのために「病気の伝播」や「ドミノ倒し」のようなメタファーを使用した。このメタファーを基礎づけるダイナミクスは同じである。すなわち、バンドワゴンには外的な力によって始動させられ、連鎖反応を触発し、一層大きなスピードでバンドワゴンをたきつける。このタイプのバンドワゴンが冷戦を終わらせた歴史に残る激震となった。バンドワゴニングに加えて、第五に「決定権を握ること」である。修正主義国は、他国間の紛争を扇動しそしてそれらからの支払いを強要することで、利得を得る機会を生み出すことができる。これはランサーやキングメーカーの役割である⁷⁷⁾。

さらに、シュウェラーは、国際システムと対外政策の媒介変数として、国家の動員能力を提起する。これは構造的リアリズムと攻撃的リアリズムへの批判でもある。構造的リアリズムが主張するように、脅威に対するバランスは、構造的システムの要因によって決定されるのではなく、国内政治プロセスによって決定される。構造的リアリズムは、国家は類似の抽出能力をもつと仮定しており、対外政策の目的の追求において国内資源を動員する「抽出の政治」を無視している。攻撃的リアリズムはパワーを極大化しようと大国の覇権争いを仮定する。しかしこうした拡張主義的な政策を追求するには国内資源を動員し、そのための政治イデオロギーが必要であることを想定していない。こうした国内資源の動員ができるのはファシスト国家なのである⁷⁸⁾。

攻撃的リアリズムにおいて、国際システムにいくつ極があるのか、そしてそれら極が現状維持的かあるいは現状打破的かによって左右されるが、現状打破国が現状維持国よりも多いときに戦争が起こりやすい。しかし、現状打破国であっても国内資源を動員できなければ拡張主義的な政策が取れない。

以上のように、古典的リアリズム、覇権的リアリズム、構造的リアリズム、攻撃的リアリズム、防衛的リアリズム、そして新古典的リアリズムとそれぞれにおける戦争について述べてきた。古典的リアリズムの中でもカーとモーゲンソーが対照的であり、カーのリアリズムでは、国際秩序の擁護者である覇権国の衰退とそれへの挑戦国の関係が問題にされ、それが解決できず結果とし

て戦争へと導かれた。それに対して、モーゲンソーのリアリズムは、現状の維持と打破をめぐる権力闘争によって勢力均衡の形態が生み出され、その形態を保持する政策として戦争が行われる。勢力均衡によって覇権の支配を退けるためには戦争は不可避である。勢力均衡を自国に有利するために、代償政策、軍備、そして同盟という方法が取られる。勢力均衡によって主要大国が存立でき、国際システムが安定化する。古典的リアリズム以降のリアリズムは国際政治がアナキーであることを強調する。覇権的リアリズムによればアナキな状態での富と力の闘争が国際政治変動を引き起こし、システムック変動としての支配国（群）と挑戦国（群）との間で覇権戦争が行われる。構造的リアリズムでは、アナキーな国際政治構造が国家の行動に勢力均衡に向かわせる。内的努力によって双極システムは安定的だが、多極システムでは同盟の柔軟性によって友好と敵対関係が流動的なため、不確実性と誤算が戦争の原因となる。攻撃的リアリズムによれば、アナキーな国際システムにおいて、大国はパワーを極大化しようとするが、現実的には世界で唯一の地域覇権国となることを目標とし、他の地域覇権国が出現するとその国力を弱めるか破壊する。戦争は勢力均衡を自国に有利に変える戦略である。国際システムのなかで、バランスのとれない多極構造において戦争が起こる可能性が最も高い。防御的リアリズムもアナキーに戦争要因があると考え、それによると安全保障のディレンマが悪化し、攻撃が優位で、攻撃的兵器を増強していけば、戦争を引き起こす可能性が高い。新古典的リアリズムは、国際システムの構造、対外政策、そして国内政治からなる理論であるが、戦争の原因は、国際システムにける現状打破国の数とその対外政策そして国内動員の可能性にあると考える。

III 「戦争へのステップ」と戦争原因研究

ヴァスケスらの「戦争へのステップ」を中心に戦争原因研究を検討する。まず「戦争へのステップ」の概要を説明し、その上で戦争原因の実証的研究も参照しながら、領土問題、同盟形成、軍備競争、そして繰り返される危機が戦争の原因となっていることを明らかにする。リアリズムはこれら戦争原因を説明できていないだけでなく、むしろ「戦争へのステップ」はリアリズムが戦争の原因となることを論証する。

1 「戦争へのステップ」

ヴァスケスによれば、「戦争へのステップ」は、戦争の開始についての理論的に一貫した説明のなかに「戦争の相関研究」プロジェクトが生み出した数えきれない研究結果を総合する試みである。「戦争へのステップ」は国家の相互作用と対外政策行動から現れるプロセスとしての戦争開始を概念化したものである。これらの相互作用は、それぞれのアクターが置かれている国内政治状況によって影響されていると同様に、個別の時代がもつ既存のグローバルな制度的コンテ

キストと規範によって形成されている。この視座は国内政治と対外政策の実践を形作るシステム要因は無視しないが、その焦点はアクターが戦争を始めるに際してアクターが互いに何をするかに当てられる⁷⁹⁾。

「戦争へのステップ」は、戦争が勃発するいくつかの経路があることを仮定する一方で、1495年から現代までの近代グローバルシステムにおける最強国が戦争をする典型的な経路を描く。それによると国民国家システムにおいて、領土紛争が他の問題よりも戦争という結果になりやすい。戦争は、互いが敵意を高めそして争点を手に負えなくさせる一連のステップによって引き起こされる。これが通常一連の危機に紛争当事者を巻き込み、その危機の一つが戦争へとエスカレートする⁸⁰⁾。

ではヴァスケスはリアリズムが戦争にどのような影響を与えていると主張するのか。彼によれば、近代グローバルシステムにおいて「リアリストのフォークロア」がシステムにおける最強国の対外政策行動の指針となる知的文化を提供する。このリアリストのフォークロアに基づいているのは、戦争からの引き出された教訓であり、そして戦争の展望を扱う実行と政策の発明である。それは、指導者が他国との関係で直面しうるさまざまな状況をいかに扱うかを指導者に教える。それによると、たとえば、脅されたならば、指導者はその能力を増強すべきである。パワーは同盟形成によってかあるいは自国の軍備増強によって増加できる。危機においては、国家はその決意と示すべきであり、そしてその力に基づいて行動すべきである。この権力政治の政策が同等の国家どうして行われるときに予期せぬ帰結のひとつとして、安全が増す代わりに、安全保障のディレンマという結果になり、そして平和を生み出す代わりに、戦争の可能性が増すことになる。すなわち、同盟形成は対抗同盟に導くことになりうる。自国の軍事強化は軍備競争を生み出す。決意を示すことは、制御できずにエスカレートする可能性のある敵意のスパイラルに導きうる。国家が取り得るすべての種類の行動のなかで、同等の国家の間で使われたときに、権力政治のリアリストの実行は、結果として頻繁に戦争になる。リアリストのアドバイスに従う国家は、同等の国家に対処するときに、ライバルとの戦争に行くことになるとの仮説が成り立つ。このようにリアリズムは戦争への道を正確な描写を提供する。この点をリアリズムの有用性として評価する向きもある。なぜならば、リアリズムとそれが具現化する論理は、外交官が戦争を回避できそして不必要な戦争に行くことなしに権力闘争に勝つことができるという政治の本質の理解を提供することを想定するからである。しかし、同盟形成、軍備構築、そして危機におけるリアルポリティークの使用というリアリストの典型的な実践は、戦争を避けるのではなく、結局戦争となる⁸¹⁾。

「戦争へのステップ」におけるリアリズムの捉え方は、モーゲンソーの古典的リアリズム、構造的リアリズム、そして防衛的リアリズムを想定している。防衛的リアリズムは「戦争へのステップ」を説明するための根拠として用いられるが、モーゲンソーの古典的リアリズムと構造的リアリズムはその問題を説明する根拠として用いられている。攻撃的リアリズムと新古典的リアリズムの直接的な言及されなくとも、両リアリズムともにモーゲンソーの古典的リアリズムと構造的

リアリズムを理論の基礎にしているため、「戦争へのステップ」の説明は基本的にそれらにも妥当すると考えられる。ただし、「戦争へのステップ」の説明から、霸権的リアリズムが除かれている。その理由は、ヴァスケスがギルピンの霸権戦争の説明には問題があると考えているからに他ならない。

第一に、霸権的リアリズムは、霸権戦争を国際システムの構造とパワーの再分配の不均衡を解決する主要な手段ととらえる。パワーの概念が戦争の開始を説明するために使われている。しかし、霸権的リアリズムが戦争をする能力があるために戦争の動機があると推論することは安易すぎる。霸権国に挑戦する動機がないかもしれず、もしあったとしてもそのシステムへの挑戦に導かないかもしれない。そのような挑戦を解く唯一の手段が戦争であるとも仮定できない。要するに、この説明は可能性と因果関係を混乱させている。二国の主要国が戦うことができるという理由は、なぜ戦うかの理由にはならないからである。不均衡からなぜ戦争が生じるかが詳述も議論もされていない。第二に、霸権理論のために整理された根拠の性質に問題がある。たとえば、霸権国は他の国に追い越されるときに戦争が場合によっては起こると主張されるが、すべての場合に必ずしも戦争が起こっていない。イギリスの霸権の間にアメリカが勃興しても、イギリスとアメリカの戦争は起きていない。霸権戦争は霸権理論が予想するように展開していない。第一次世界大戦は、イギリスの霸権にドイツが挑戦して開始されたのではない⁸²⁾。

では「戦争へのステップ」を表1にしたがって説明していく。表1は主要国が戦争に巻き込まれる典型的な経路を要約したものである。その経路は国家間戦争に導く一連のステップとして概念化されている。これは蓋然性の説明として、多くのステップが取られるほど、戦争の可能性が高くなると仮定する。どのステップも戦争を不可避にするものではない一方で、一つのステップを取ることはもう一つのステップを取る蓋然性を高め、意思決定者にとって戦争の回避を困難にさせる行動のシンドロームを生み出す。表1にリストされている各ステップが取られた後、戦争の蓋然性が増す。領土問題が戦争の根本的原因として仮定され、権力政治の実行が戦争の直接的原因とみられている⁸³⁾。

次に、「戦争へのステップ」にしたがって、戦争の根本的原因となる領土問題、そして権力政治の実践としての同盟、軍備競争、そして繰り返される危機について検討する。

表1 「戦争へのステップ」の説明の要約

領土問題の惹起（根本的原因）

以下のような権力政治の流儀で領土問題を対処する（直接的原因）

同盟形成

軍事力増強

繰り返される危機

以下のときに一つの危機が戦争にエスカレートする

領土問題に対する物理的威嚇

軍備競争の継続

危機にわたってエスカレートしていく交渉

敵対的なスパイラル

少なくとも一方側の強硬派

(出所) John A. Vasquez, "Reexamining the Steps to War," in Manus I. Midlarsky, ed. *Handbook of War Studies II* (Ann Arbor: The University of Michigan Press, 2000), p. 373.

2 領土問題

リアリズムは、権力闘争や勢力均衡のせめぎ合いのなかで領土の征服が行われ戦争になるにもかかわらず、領土問題を戦争の主要原因とは考えてはいない。「戦争へのステップ」によれば、領土紛争が戦争の根本的原因なのである⁸⁴⁾。ポール・ヘンゼルによると、国家が接近していることや領土という地理的な要因が国家間紛争に影響を与える。近接する敵対的な国は遠方の国家よりも紛争になりやすい。それは、1816年以來すべての武力紛争の半分以上、そして最も深刻な紛争形態の3分の2以上を数える。近さのインパクトは大国よりも弱小国の方が大きい。領土問題も紛争に導きられやすく、それは武力紛争の4分の1以上を数え、そして最も深刻な紛争形態の半分以上を数える⁸⁵⁾。

領土問題が他の問題以上に突出する理由は、それには、有形無形の価値そして評判という重要性があるからである。第一に、領土の有形な価値として、戦略的な鉱物、石油、淡水、肥沃な農業用地があげられる。それには、海へのアクセスや主要な貿易ルートも考えられる。自らの産業とインフラを伴う主要な人口中心部が含まれるときに領土に価値がある。国家のパワーと安全に資する領土にも有形な価値ある。第二に、領土は無形な重要性を帯びる。その理由は、国家の存在と自律そのものが領土に根付いていて、ナショナルなアイデンティティと凝集性の中心に領土があると主張されるからである。ヴァスケスによれば、領土は分割可能で具体的な利害であるにもかかわらず、領土にあらゆる種類の規範的イデオロギー的な重要性が吹き込まれることで、領土が「象徴的超越的な観点で」取り扱われる⁸⁶⁾。第三に、領土は評判という理由から重要となる。すなわち、指導者が領土をめぐる敵対者に屈するならば、他の敵対者も他の問題でその要求を強要することになる。領土が極めて目立つ問題であるために、領土問題をめぐる国家の行為は他の問題よりも評判効果をいっそう生み出しやすい⁸⁷⁾。

ヘンゼルは、領土問題を解決するテクニックの効果を考察しており、解決しなかった割合が81%と圧倒的に大きい、すべてかほとんど解決した割合は19%である。成功したなかで、軍事紛争による解決は9.8%で最も低く、両当事者の交渉は17.9%、拘束力のない第三者の介入が19.6%、拘束力のある第三者の介入が76.9%である⁸⁸⁾。

領土拡張をパワーの拡大と考えるリアリズムは、解決の可能性が最も低い軍事力に訴えることになりうる。それにもかかわらずリアリズムの政策が実践される。しかしヴァスケスによれば、「隣国との間で国境線を解決したときに、長期の平和期間が生じる。これは戦争の領土的説明とリアリズムの間の主要な検証可能な相違の一つである⁸⁹⁾。」たとえば、ポール・フートの研究によれば、1816年から1990年の間に142の国境協定と領土紛争解決が締結され、1995年の時点でその合意の126(約89パーセント)に効力があった⁹⁰⁾。他の研究でも、国家はその国境確定に合意すると、その後に軍事紛争を経験しても、国家は互いに戦争に行く可能性は低い⁹¹⁾。領土問題が解決されると、リアリズムの政策がかならずしも実行されるわけではない。

3 同盟形成

同盟はリアリズムの中心的な政策である。モーゲンソーによれば、同盟は自らの力に他国の力を加えたりあるいは敵対国から他国の力を引き離したりする政策である。構造的リアリズムでは、同盟は外的努力という外的バランスである。攻撃的リアリズムにとっても、同盟結成は外的バランスである。新古典的リアリズムによれば、同盟は脅威に対する反応であり、利益のための知覚された機会への反応である。同盟の捉え方に違いがあるが、それらは基本的にはモーゲンソーの理解を基礎としており、それは国益あるいは安全の維持・増進を目的としている。しかし同盟関係と戦争の関係は明確ではない。

「戦争へのステップ」を含む戦争原因研究では同盟と戦争についての関係の研究が行われてきた。戦争原因研究において、同盟と戦争の関係を否定的に見るかあるいは肯定的に見るかで見方が分かれる。同盟が戦争を防ぐという否定的な見方は、リアリズムを根拠に勢力均衡や国際システムの均衡を維持することで戦争を予防すると主張する⁹²⁾。その例が勢力均衡として19世紀のウィーン体制である。しかし、モーゲンソーはウィーン体制を勢力均衡ではなく、それを「国際統治」⁹³⁾として見ており、逆に勢力均衡維持のために戦争が行われたと考えている。ウォルツの双極均衡論は内的バランスによるものであって同盟という外的バランスによるものではない。

「戦争へのステップ」は、マルヴィン・スモールとシンガーの研究やレヴィらの研究⁹⁴⁾に依拠して、同盟が戦争と関係すると主張する。レヴィによれば、16世紀から20世紀までの間で、19世紀を除いて、同盟の多くが同盟形成の5年以内に同盟の少なくとも一か国を含む戦争を伴った。さらに、主要国を含む同盟は他の同盟よりも戦争となる傾向がある。16世紀から18世紀まで個々の主要国の同盟は、戦争を頻繁に伴った。これはその時代の3分の2以上の期間で3分の2の主要国に当てはまる。これは、1815年以前には、同盟は攻撃的目的のために形成されたことを反映している。一方で、国家に同盟形成を導く動機が多様化した。20世紀にはいっそう複雑化したのが、同盟に入ったほとんどの主要国は戦争を伴った。たとえば、7つの大国のうち6か国が同盟に入った後に、互いに戦争になっていた。対外政策の実行として、同盟はその効果において好戦的である。

それにもかかわらず、同盟が戦争原因に関してどのくらいの要因となるかを識別することはむずかしい。同盟は戦争によってかならずしも伴われるものではないからである。19世紀は同盟が戦争を伴うことが最も少なかった⁹⁵⁾。

さらに、レヴィが証明したことは、同盟が戦争の必要条件ではないということである。ほとんどの戦争は同盟がなくとも起こる。16世紀から20世紀まで、平均で26%の戦争のみが戦争参加国の一か国を含む同盟によって始まった。しかしながら、同盟は戦争を伴う国際システムの混乱の指標である。16世紀から18世紀まで、主要国を含む43%の戦争が主要国を含む同盟によって始まった。逆にいうと、約半数の主要国を含む戦争が先行する同盟がなくとも起こった。同盟以外の他の要因が戦争を引き起こしたと言える⁹⁶⁾。

4 軍備競争

軍備あるいは軍事力はリアリズムにとって重要なパワーの要素である。軍備が戦争や対立に導くか否かについて、リアリズムは、防御的リアリズムを除き、それは考察の対象ではない。戦争に備えるために軍備は不可欠であり、軍備は勢力均衡の手段である。しかし、防御的リアリズムの安全保障のディレンマの論理からすれば、自国の安全のための軍備が他国を不安し、他国が軍備を拡大すれば、自国も不安になり、結果として軍備競争を誘発し、対立を深めることになる。安全保障のディレンマから、意図せざる結果としての軍備競争の問題が見える。

マイケル・ウォレスは、最終的に戦争となった2か国のペアの国家は急激な軍備競争によって特徴づけられたと実証した⁹⁷⁾。軍備競争は戦争に導く可能性が高いということである。これに対して、ポール・ディールとマーク・クレシェンツィは、軍備競争と暴力紛争が直接に関係するのではなく、それは「永続的なライバル関係」が現れたものであると主張する。ライバル関係とは「根本的に有形あるいは無形の財をめぐる対立する選好あるいは目標」についてのことである。ライバル関係は他の関係と異なる。ライバル関係は、互いに競争する同じペアの国家からなる。その関係は永続的で軍事的対立的な関係である。そしてライバル関係内の対立は時間的空間的に関連する。ライバル関係の事件は個別のものではなく、相互に関連する。対立する国家間に2つの概念的な関連がある。第一に、「過去を引きずる」ことである。ライバルは共有の歴史をもち、ライバル関係の事件が現在と将来の行動に影響を与える。第二に、ライバルは、相互の紛争、危機、そして戦争が将来継続すると見込んでいる。この予想が現在の対外政策の選択を条件付ける⁹⁸⁾。

スーザン・サンプルは、軍備競争が戦争と直接には関係しないとみるライバル関係の研究と「戦争へのステップ」は対照的な議論をしていると主張する⁹⁹⁾。しかしながら、ヴァスケスは、軍備競争は少なくともあるレベルで、ライバル関係を前提としており、そしてひとたび軍備競争が始まるとそのライバル関係を強めるというコンセンサスがあると述べている。ライバル関係の研究と「戦争へのステップ」は相容れないわけではない。しかし、「戦争へのステップ」は、シンガーの「軍備・緊張スパイラル」アプローチを取っている。すなわち、それによると軍備競争の鍵と

なる動機は、知覚された威嚇と敵意から結果として生じる不安である。この一般的な不安は、ライバル国の軍備構築や同盟形成による能力の増加によって、大きな軍事力をもつと認識されるときはいつでも明確な威嚇になる。軍備構築によって、それがたんに存在しているだけで、深刻な紛争が戦争にエスカレートすることになる可能性がある。しかし、これはある環境においてのみ起こるといえる。その環境とは、主要国間が近接しており、そして主要国が相対に対等であり、すなわちライバル関係にある環境である。近接したライバル関係の中で起こる軍備構築は、戦争への重要なステップとなる¹⁰⁰⁾。

5 繰り返される危機

ヴァスケスによれば、危機において対等な国家間ではリアルポリティックの戦術が使われる傾向がある。危機が繰り返されると戦争の蓋然性は高まる。特に他のすべてのステップがすでに行われているならば、戦争の蓋然性は高くなる。「危機の繰り返しが戦争の現実のエンジンである。」さらに、危機が繰り返されると、アクターはその交渉戦術を強化し、戦争にますます近づくことにある。このエスカレーションは、それぞれの国内の穏健派の影響力を低め、強硬派の影響力を高める機能を果たすことになる。危機は次の4つの場合に戦争にエスカレートする可能性がある。第一は、危機が領土問題への物理的な威嚇によって引き起こされる場合である。第二はそれが同じライバルとの一連の危機における一つである場合である。リアルポリティックの戦術を使うことが結果としてより強制的で敵対的なライバルになる。第三は敵対的な相互作用のスパイラルが危機において生じる場合である。第四は強硬派が少なくとも一方の側で支配的である場合である¹⁰¹⁾。

リアリズムのなかでモーゲンソーがリアルポリティックの外交交渉を説明している。それは約束や威嚇という「アメとムチ」を用いる交渉である。しかし、交渉当事国がともに約束を守るならまだしも、両者またはどちらか一方が威嚇するならば、交渉の成果は望めない。ヴァスケスは、ラッセル・レングに依拠して、威嚇は極端な反応を生み出しやすいと主張する。極端な反応とは、全面的な服従かあるいは抵抗である。抵抗とは対抗的な威嚇あるいは処罰という観点での抵抗である。抵抗的な反応は相争う国家が相対的に同等の能力をもつときに最も起こりやすい。抵抗的な反応が戦争に結びつくという間接的な証拠もある¹⁰²⁾。

ヴァスケスによれば、リアルポリティックの交渉戦術がいかに紛争をエスカレートさせるかということを理解する鍵は、指導者が一つの紛争から次に紛争までにライバルに向けた行動を変化させる仕方にある。ヴァスケスは、3つの継続的な紛争に巻き込まれた互角の6つのペアを検討したレングの研究をもとに、リアルポリティックの交渉戦術によって戦争にエスカレートすると主張する。すなわち、以前の紛争の敗者は、武力行使のコミットメントのような十分な決意を示すことに失敗したことで敗北したと考え、二回目の紛争を開始する可能性がある。同等な国家間では、武力の威嚇は通常抵抗に遭う。同等の国家は武力をもって武力に対抗することになる。結

果として、両当事者はそれぞれの危機において強制的レベルをエスカレートさせる傾向がある。初期には戦争が起こらなかったなら、第三回目の紛争によってますます戦争となる可能性がある。リアルポリティークの交渉戦術を使うことが危機を戦争にエスカレートさせる¹⁰³⁾。

近代グローバル政治システムにおけるアクターが、同盟形成、軍備構築、パワー・バランス、そしてリアルポリティークの戦術のようなリアリストの共通の実践を採用する。それはリアリズムが行動を形成してきたシステムのフォークロアの部分だからである。それゆえ、それは観察者に戦争の開始と結びつくと予想させる行動の種類のラフな描写を提供する。この実践は平和や安全を生むのではなく、不安の増大、強制、プロセスにおける紛糾、そして戦争に導く一連のステップを生むのである。各ステップが意思決定者に戦う以外の選択をほぼなくす畏にますます導くことになる¹⁰⁴⁾。

以上のように、領土紛争に対処するために権力政治の対外政策の実践を使用することが戦争の蓋然性を高めことになる。しかし、権力政治が使用されるかどうかは作用しているグローバル政治システムの性質に部分的によって決まる。グローバル制度のコンテキスト、それが特に問題を解決するための規範と「ゲームのルール」を提供するかどうかは、国家が権力政治に訴えるかどうかによってインパクトを与える。戦争の防止と平和の創出は、武力行使よりも外交によって問題を解決するメカニズムを提供する構造をいかに構築するかの学習を必要とする¹⁰⁵⁾。

IV 批判的考察

現代において主要大国間の戦争はほぼ起きていない。しかしリアリズムの知的伝統にとらわれたままでは、大国間の戦争が起こる可能性がある。つまり、「戦争へのリアリストの道」を進むことになる。すなわち、それは、同等の大国間では、グローバル政治システムとグローバル制度のコンテキストがそれぞれリアリズムの対外政策の実行を促し、大国間関係を敵対的なライバル関係とさせる。それぞれの国内政治においても、対外強硬派が影響力をもち、リアリズムの対外政策が支持される。領土問題が絡むときに、リアリズムの対外政策を実行すると戦争の蓋然性が高まる。そもそもグローバル政治システムとグローバル制度のコンテキストが、リアリズムを反映したものである。こうして「戦争へのリアリストの道」は環状線のように循環する。

この循環を断ち切るには、リアリズムの戦争原因論を反証し批判し、リアリズムからの反論に論じ直すためには、逆にリアリズムの中から戦争に導かない政策と理論を探ることである。

リアリズムは、戦争の原因について国際システムが、覇権国の単極、双極、三極を含む多極かどうかについての議論を行う。その議論の前提が権力闘争やアナキーである。しかしながら、「戦争へのステップ」によれば、国際システムにおける大国の数が起因して戦争になる実証的な証拠はない。戦争の直接的な原因は領土問題であり、領土問題が絡めば、大国間での戦争の蓋然性は

高い。今日のアメリカを唯一の覇権国あるいは地域覇権国と見るならば、古代のスパルタとアテナのように地理的に近接していながら、その覇権を脅かすいかなる大国も存在しない。

リアリズムにおいて、挑戦国、現状打破国、侵略国、貪欲国、不満足国などが国際秩序や勢力均衡を乱す存在である。こうした国家群が戦争を引き起こす主体と見なされている。しかし、リアリズムはなぜこうした国家群が出現するかの考察を行っているとはいえない。新古典的リアリズムを除けば、こうした政策を支持する国内政治の考察も十分ではない。新古典的リアリズムはなぜ対外強硬派が国内政治の主流となり、好戦的な対外政策を行うまでは考察していない。さらにリアリズムは、覇権国、現状維持国、満足国などの受益国側にどこに問題があるかの考察も不十分であろう。ただし、カーの「二十年の危機」はまさにこの問題に取り組んだ。しかし、「戦争へのステップ」によれば、非受益国側が権力政治にしたがったがゆえに戦争となったと言える。領土が根本的な問題であれば、その解決に導く最も成功する方法である拘束力のある第三者による仲介を試みるべきなのである。

リアリズムは、勢力均衡を自国に有利にするために対外政策として同盟形成を重視する。それは平和のためではなく、自国の国益や安全保障のためである。しかし、敵対関係にある国家には、その同盟は好戦的な政策と見なされる。実証的研究に見られるように、戦争の前に同盟形成が行われてきた。安全保障のディレンマを重視する防御的リアリズムを除き、リアリズムは軍備をパワーの重要な要素と考える。しかし、自国の軍備増強は他国にとっては威嚇となり、特にライバル関係のときには軍備競争が戦争へのステップとなる。ライバルの大国が外交交渉において互いに強制的で敵対的な権力政治の手法で渡り合えば、紛争は妥協的な解決どころか、ますますエスカレートすることになる。

では、リアリズムのなかで戦争に導かない政策や理論は何かを、特に防御的リアリズムと古典的リアリズムから手がかりを引くことができる。第一に、防御的リアリズムから指摘できる。安全保障のディレンマの問題を認識し、互いに協力政策を行うことであり、防御の優位性を確立し、防御的兵器体系を整備することであり、そして安全保障共同体を拡大することである。

第二に、古典的リアリズムには、それ以降のリアリズムだけではなく、「戦争へのステップ」を含め、それらの研究とは異なり、倫理や道義の考察が重視されている。逆に言えば、ネオリアリズム以降のリアリズムはこうした観点を軽視して、古典的リアリズムの哲学を前提にしてきた。戦争原因研究においても実証的研究が中心で規範的な研究は軽視されてきた。しかしながら、倫理や道義といっても、モーゲンソーの最小悪という倫理観ではない。カーのように「ユートピアとリアリティ」の対立を力によって総合しようとするのでもない。

しかし、国際関係研究には実証主義的研究と哲学的研究の両方が重要である。ホフマンが主張するように、リアリズムとアイデアリズムの「双子の逃避主義」が回避しなければならないからである。すなわち、それは、慣習的なものの必然性を陰気に想定するリアリズムの逃避主義と、世界進歩への安易な道を仮定するアイデアリズムの逃避主義である。この双子の逃避主義を回避

するために、ホフマンは、実証主義的な分析と国際関係の哲学を結合する「有意義なユートピアニズム」の構築を主張する¹⁰⁶⁾。戦争原因研究についても同様に、さらなる実証主義的な分析の蓄積によってリアリズムの戦争原因を反証し、そして暗黙的に前提とされているリアリズムの国際関係の哲学の問題を指摘し、それに代わる現実的なヴィジョンを提起しなければならない¹⁰⁷⁾。これにより、「戦争へのリアリストの道」のひとつが遮断できるであろう。

注

- 1) Meredith Reid Sarkees, Frank Whelon Wayman and J. David Singer, “Inter-State, Intra-State, and Extra-State Wars: A Comprehensive Look at Their Distribution over Time, 1816-1997,” *International Studies Quarterly*, Vol. 47, No. 1 (March 2003), p. 60; 多湖淳『戦争とは何か—国際政治学の挑戦—』中央公論新社、2020年、47-48ページ。
- 2) Therése Pettersson and Peter Wallensteen, “Armed Conflicts, 1946-2014,” *Journal of Peace Research*, Vol. 52, No. 4 (July 2015), pp. 536-550; Håvard Strand, Siri Aas Rustad, Henrik Urdal and Håvard Mokleiv Nygård, *Trends in Armed Conflict, 1946-2018, Conflict Trends, 03. 2019 Oslo*: Peace Research Institute Oslo (PRIO).
- 3) Ian Davis, “Tracking Armed Conflicts and Peace Processes in 2018,” in Stockholm International Peace Research Institute, ed., *SIPRI Yearbook 2019 Armaments, Disarmament and International Security* (Oxford: Oxford University Press, 2019), p. 35. メアリー・カルドアはこうした現代の戦争を「新しい戦争」とであると主張する。Mary Kaldor, *New and Old Wars: Organized Violence in a Global Era*, Third Edition (Cambridge: Polity Press, 2012); Mary Kaldor, “Inconclusive Wars; Is Clausewitz Still Relevant in These Global Times?,” *Global Policy*, Volume 1, Issue 3 (October 2010), pp. 274-279. DOI:10.1111/j.1758-5899.2010.00041.x.; 田中宏明「新しい戦争論の批判的考察—メアリー・カルドア研究を中心に—」星野昭吉編『グローバル危機政治秩序とガバナンスのダイナミズム』テイハン、2019年、61-77ページ。
- 4) Raimo Väyrynen, “Introduction: Contending Views,” in Raimo Väyrynen, ed., *The Waning of Major War: Theories and Debates* (London: Routledge, 2006), p. 13.
- 5) Stephen M. Walt, “International Relations: One World, Many Theories,” *Foreign Policy*, No. 110 (Spring 1998), pp. 29-46.
- 6) Stephen M. Walt, “The Enduring Relevance of the Realist Tradition,” in Ira Katzelson and Helen V. Milner, eds., *Political Science: State of the Discipline* (New York: W. W. Norton Company, 2002), pp. 199-201.
- 7) William C. Wohlforth, “Realism and Security Studies,” in Myrian Dunn Cavelti

- and Thierry Balzac, eds., *Routledge Handbook of Security Studies* (Oxford: Routledge, 2017), p. 11.
- 8) Jack S. Levy and William R. Thompson, *Causes of War* (West Sussex: Wiley-Blackwell, 2010), p.28.
 - 9) John A. Vasquez, “The Steps to War: Toward a Scientific Explanation of Correlates of War Findings,” *World Politics*, Vol. 40, No. 1(October 1987),p. 142.
 - 10) Paul D. Senese and John A. Vasquez, *The Steps to War: An Empirical Study* (Princeton: Princeton University Press, 2000), p. 8.
 - 11) 古典的リアリストについては以下を参照。Michael Joseph Smith, *Realist Thought from Weber to Kissinger* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1986). [押村嵩、他訳『現実主義の国際政治思想—M. ウェーバーから H. キッシンジャーまで—』垣内出版、1997年。]; 土山實男『安全保障の国際政治学—焦りと傲り— 第二版』有斐閣、2014年。
 - 12) Stanley H. Hoffmann, “An American Social Science: International Relations,” *Daedalus*, Vol.106, No. 3(Summer 1977),p. 44.
 - 13) ジャック・レヴィによれば、覇権的リアリズムには、パワー・トランジション理論、覇権安定理論、長期循環理論が含まれる。本稿では、ギルピンの議論にのみ言及する。Jack S. Levy, “War and Peace,” in Walter Carsnaes, Thomas Risse and Beth A. Simmons, eds., *Handbook of International Relations* (Los Angeles: SAGE, 2002), p. 354.
 - 14) 今日のリアリズムについては以下を参照。Benjamin Frankel, *Realism: Restatements and Renewal* (London: Frank Cass, 1996); William C. Wohlforth, “Realism,” in Christian Reus-Smith and Duncan Snidal, eds., *The Oxford Handbook of International Relations* (Oxford: Oxford University Press, 2008), pp. 131-149; Charles L. Glaser, “Realism,” in Allan Collins, eds., *Contemporary Security Studies*, Second Edition (Oxford: Oxford University Press, 2010), pp. 15-33; Colin Elman and Michael A. Jensen, *Realism Reader* (London: Routledge, 2014).
 - 15) Edward Hallett Carr, *The Twenty Years’ Crisis, 1919-1939*, Second Edition (New York: Harper & Row, 1964). [原彬久訳『危機の二十年—理想と現実—』岩波書店、2011年。]; Hans J. Morgenthau, *Scientific Man Vs. Power Politics* (Chicago: The University of Chicago Press, 1946). [星野昭吉、高木有訳『科学的人間と権力政治』作品社、2018年。]
 - 16) Edward Hallett Carr, *The Twenty Years’ Crisis*, p.100. [訳、203 ページ。]
 - 17) Hans J. Morgenthau, *Scientific Man Vs. Power Politics*, p. 201. [訳、219 ページ。]

- 18) Edward Hallett Carr, *The Twenty Years' Crisis*, pp.224-239. [訳、422-452 ページ。]
- 19) Hans J. Morgenthau, "Political Science of E. H. Carr," *World Politics* Vol.1, No. 1(October 1948), p. 129.
- 20) Hans J. Morgenthau, *Scientific Man Vs. Power Politics*, p. 9. [訳、19 ページ。]
- 21) Hans J. Morgenthau, *Politics Among Nations: The Struggle for Power and Peace*, Fifth Edition, Revised (New York: Alfred A. Knopf, 1978), p. 29. [現代平和研究会訳『国際政治—権力と平和—』福村出版、1986年、30 ページ。]
- 22) *Ibid.*, pp.5-6. [訳、4-5 ページ。]
- 23) *Ibid.*, p.173. [訳、180 ページ。]
- 24) *Ibid.*, pp.185-204. [訳、191-211 ページ。]
- 25) *Ibid.*, p.209. [訳、218 ページ。]
- 26) *Ibid.* [訳、同上書。]
- 27) *Ibid.*, p.217. [訳、226 ページ。]
- 28) *Ibid.*, p.217. [訳、221-228 ページ。]
- 29) *Ibid.*, pp.248-252. [訳、259-265 ページ。]
- 30) Stanley H. Hoffmann, *The State of War* (New York: Frederic A. Prueger, 1965), p. 94.
- 31) Hans J. Morgenthau, *Politics Among Nations*, p. 341. [訳、354 ページ。]
- 32) *Ibid.*, pp.544-558. [訳、560-574 ページ。]
- 33) Robert Gilpin, *The Political Economy of International Relations* (Princeton: Princeton University Press, 1987). [佐藤誠三郎, 竹内透監修 大蔵省世界システム研究会訳『世界システムの政治経済学—国際関係の新段階—』東洋経済新報社、1987年。]
- 34) Robert Gilpin, *War and Change in World Politics* (London: Cambridge Press, 1981), p. 7.
- 35) *Ibid.*, pp.39-44.
- 36) *Ibid.*, pp.10-15.
- 37) *Ibid.*, pp.197-200.
- 38) Robert Gilpin, "The Theory of Hegemonic War," in Robert I. Rotberg and Theodore K. Rabb, eds., *The Origin and Prevention of Major Wars* (New York: Cambridge University Press, 1989), pp. 20-29.
- 39) Robert Gilpin, *War and Change in World Politics*, p.198.
- 40) Kenneth N. Waltz, *Man, the State and War: A Theoretical Analysis* (New York: Columbia University Press, 1959). [渡邊昭夫、岡垣知子訳『人間・国家・戦争—国際政治の3つのイメージ—』勁草書房、2013年。]
- 41) Kenneth N. Waltz, "The Origins of War in Neorealist Theory," in Robert I. Rotberg

- and Theodore K. Rabb, eds., *The Origin and Prevention of Major Wars* (New York: Cambridge University Press, 1989), p. 44.
- 42) Kenneth N. Waltz, *Theory of International Politics* (Reading, Mass.: Addison-Wesley Publishing Co., 1979), pp. 88-99. [河野勝、岡垣知子訳『国際政治の理論』勁草書房、2010年、117-131 ページ。]
- 43) *Ibid.*, p.118. [訳、155-156 ページ。]
- 44) *Ibid.*, p.126. [訳、167 ページ。]
- 45) *Ibid.*, p.118. [訳、155-156 ページ。]
- 46) *Ibid.*, p.118. [訳、156 ページ。]
- 47) *Ibid.*, pp.125-128. [訳、166-169 ページ。]
- 48) *Ibid.*, p.168. [訳、222 ページ。]
- 49) John J. Mearsheimer, *The Tragedy of Great Power Politics* (New York: W. W. Norton & Company, 2001), p. 15. [奥山真司訳『大国政治の悲劇』五月書房、2007年、45 ページ。]
- 50) *Ibid.*, pp. 19-22. [訳、50-55 ページ。]
- 51) *Ibid.*, pp.30-36. [訳、54-62 ページ。]
- 52) *Ibid.*, pp.40-42. [訳、67-71 ページ。]
- 53) *Ibid.*, pp.147-155. [訳、197-208 ページ。]
- 54) *Ibid.*, pp.155-157. [訳、209-211 ページ。]
- 55) *Ibid.*, pp.157-159. [訳、211-214 ページ。]
- 56) *Ibid.*, p.267. [訳、345 ページ。]
- 57) *Ibid.*, pp.162-163. [訳、218 ページ。]
- 58) *Ibid.*, pp.334-335. [訳、428-429 ページ。]
- 59) *Ibid.*, pp.357-347. [訳、432-446 ページ。]
- 60) Robert Jervis, "Realism in the Study of World Politics," *International Organization*, Vol. 52, No. 4 (Autumn 1998), p. 971.
- 61) John H. Herz, *Political Realism and Political Idealism: A Study in Theories and Realities* (Chicago: The University of Chicago Press, 1951), p. 4.; John H. Herz, "Idealist Internationalism and the Security Dilemma," *World Politics*, Vol. 2, No. 2 (January 1950), p. 157; Arnold Wolfers, *Discord and Collaboration: Essays on International Politics* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1962), p. 84; Robert Jervis, *Perception and Misperception in International Politics* (Princeton: Princeton University Press, 1976), p. 66.
- 62) Robert Jervis, "Cooperation under the Security Dilemma," *World Politics*, Vol. 30, No. 2 (January 1978), p.169. ケン・ブースとニコラス・ウィーラーは、ジャーヴィス

の安全保障のディレンマの定義を含め、「逆説」と「ディレンマ」の意味を混乱させていると指摘する。Ken Booth and Nicholas J. Wheeler, *The Security Dilemma: Fear, Cooperation and Trust in World Politics* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2008), pp. 1-10.

- 63) Robert Jervis, "Cooperation under the Security Dilemma," pp.170-186.
- 64) *Ibid.*, pp.186-206. 攻撃・防御理論については、Sean M. Lynn-Jones, "Offense-Defense Theory and Its Critics," *Security Studies*, Vol. 4, No. 4(Summer 1995), pp. 660-691.
- 65) Charles L. Glaser, "The Security Dilemma Revisited," *World Politics*, Vol. 50, No. 1 (October 1997), pp.171-201.
- 66) Stephen Van Evera, *Causes of War: Power and Roots of Conflict* (Ithaca: Cornell University Press, 1999),pp. 117-192.
- 67) Robert Jervis, "Realism, Neorealism, and Cooperation," *International Security*, Vol. 24, No. 1 (Summer 1999), pp.48-50.
- 68) Robert Jervis, "Theories of War in the an Era of Leading-Power Peace," *American Political Science Review*, Vol. 96, No. 1 (March 2002), pp.1-14.
- 69) Gideon Rose, "Neoclassical Realism and Theories of Foreign Policy," *World Politics*, Vol. 51, No. 1 (October 1998), pp. 144-172.
- 70) William C. Wohlforth, "Gilpinian Realism and International Relations," *International Relations*, Vol. 25, Issue 4(December 2011), pp. 499-511.
- 71) Gideon Rose, "Neoclassical Realism and Theories of Foreign Policy," pp. 146-147. ウォルツは国際政治の理論は対外政策の理論ではないと反論している。Kenneth N. Waltz, "International Politics is not Foreign Policy," *Security Studies*, Vol. 6, No. 1(Autumn 1996), pp.54-57.
- 72) Randoll L. Schweller, *Deadly Imbalance: Tripolarity and Hitler's Strategy of World Conquest* (New York: Columbia University Press, 1998), pp. 16-19;.Randoll L. Schweller, "Neorealism's Status - Quo Bias: What Security Dilemma?," *Security Studies*, Vol. 5, Issue 3 (Spring 1996), pp.92-124. ランドール・L. シュウェラー、坂田慶子訳「同盟の概念」船橋洋一編『同盟の比較研究—冷戦後の秩序を求めて—』日本評論社、2001年、249-284 ページ。ランドール・L. シュウェラー、戸谷美苗訳「危機の二十年 1919-39」コリン・エルマン、ミリアム・フェンディアス・エルマン編『国際関係研究へのアプローチ—歴史学と政治学の対話—』東京大学出版会、2003年、158-188 ページ。
- 73) Randoll L. Schweller, *Deadly Imbalance*, p.60.
- 74) *Ibid.*, pp.65-75.

- 75) Stephen M. Walt, *The Origins of Alliances* (Ithaca: Cornell University Press, 1987), pp.17-21.
- 76) Randall L. Schweller, *Deadly Imbalance*, p. 76-77; Randall L. Schweller, “Bandwagoning for Profit: Bringing the Revisionist State Back In,” *International Security*, Vol. 19, No. 1(Summer 1994), pp. 72-107.
- 77) Randall L. Schweller, *Deadly Imbalance*, pp. 77-83.
- 78) Randall L. Schweller, *Unanswered Threats: Political Constraints on the Balance of Power* (Princeton: Princeton University Press, 2006),pp. 1-68; Randall L. Schweller, “Neoclassical Realism and State Mobilization: Expansionist Ideology in the Age of Mass Politics,” in Steven E. Lobell, Norrin M. Ripsman, Jeffrey W. Taliaferro, eds., *Neoclassical Realism, the State, and Foreign Policy* (Cambridge: Cambridge University Press, 2009), pp. 227-250.
- 79) John A. Vasquez, “Reexamining the Steps to War,” in Manus I. Midlarsky, ed. *Handbook of War Studies II* (Ann Arbor: The University of Michigan Press, 2000), pp. 371-373; John A. Vasquez, *The War Puzzle* (Cambridge: Cambridge University Press, 1993); John A. Vasquez, *The War Puzzle Revisited* (Cambridge: Cambridge University Press, 2009); Paul D. Senese and John A. Vasquez, *The Steps to War: An Empirical Study* (Princeton: Princeton University Press, 2008). 「戦争へのステップ」についての研究は次を参照。Michael P. Colaresi and William R. Thompson, “Alliances, Arms Buildups and Recurrent Conflict: Testing a Steps-to-War Model,” *Journal of Politics*, Vol. 67, No. 2 (May 2005), pp.345-364; Brandon Valeriano and Victor Martin, “Pathways to Interstate War: Qualitative Comparative Analysis of Steps-to-War Theory,” *Josef Korbel Journal of Advanced International* (Summer 2010), pp. 1-27.
- 80) John A. Vasquez, “Reexamining the Steps to War,” p. 372.
- 81) *Ibid.*,pp. 372-373.
- 82) John A. Vasquez, *The War Puzzle*, pp.94-97.
- 83) John A. Vasquez, “Reexamining the Steps to War,” pp. 373-375.
- 84) John A. Vasquez, *The War Puzzle*, pp.123-152.
- 85) Paul R. Hensel, “Territory: Geography, Contentious Issues, and World Politics,” in John A. Vasquez, ed., *What Do We Know about War?*. Second Edition (Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, 2012), pp.3-22.
- 86) John A. Vasquez, *The War Puzzle*, p. 78.
- 87) Paul R. Hensel, “Territory ,” pp. 19-20; Paul R. Hensel and Sara McLaughlin, “Issue Indivisibility and Territorial Claims,” *GeoJournal*, Volume 64, Issue 4(December

- 2005),pp. 276-285.
- 88) Paul R. Hensel, "Territory ," pp. 19-20.
- 89) John A. Vasquez, "What Do We Know about War?," in John A. Vasquez., ed. *What Do We Know about War?*,p. 306.
- 90) Paul K. Huth, *Standing Your Ground: Territorial Disputes and International Conflict* (Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1996),p. 92.
- 91) Andrew P. Owsiak, "Signing Up for Peace: International Boundary Agreements, Democracy, and Militarized Interstate Conflict," *International Studied Quarterly*, Vol. 59, No. 1 (March 2012),p. 61.
- 92) Choong-Nam Kang, "Alliances: Path to Peace or Path to War ?." in John A. Vasquez, ed., *What Do We Know about War?*,pp. 27-44.
- 93) Hans J. Morgenthau, *Politics Among Nations*, pp. 448-457. [訳、465-473 ページ。]
- 94) J. David Singer and Melvin Small, "Alliance Aggregation and the Onset of War,1815-1945," in J. David Singer ed., *The Correlate of War: I Research Origins and Rationale* (New York: The Free Press,1979),pp.225-265; Jack S. Levy, "Alliance Formation and War Behavior: An Analysis of the Great Powers, 1495-1976," *Journal of Conflict Resolution*, Vol. 25, No. 4(December 1981), pp. 581-631.
- 95) John A. Vasquez, *The War Puzzle*, pp.162-164.
- 96) *Ibid.*,p. 165.
- 97) Michael D. Wallace, "Arms and Escalation: Some New Evidence," *Journal of Conflict Resolution*, Vol. 23, No. 1 (March 1979),pp.3-16 .
- 98) Paul F. Diel and Mark J. Cresenzi, "Reconfiguring the Arms Race-War Debate," *Journal of Peace Research*, Vol. 35, No. 1(January 1998), pp. 111-118; Paul F. Diel and Gray Goertz, "The Rivalry Process: How Rivalries Are Sustained and Terminated," in John A. Vasquez, ed., *What Do We Know about War?*,pp. 84-86.
- 99) Susan G. Sample, "Arms Races A Causes or a Symptom," in John A.Vasquez,ed.,*What Do We Know about War?*, pp. 116-120.
- 100) J. David Singer, "Threat-Perception and Armament-Tension," in J. David Singer ed., *The Correlate of War: I* ,pp.27-47; John A. Vasquez, *The War Puzzle*, pp.177-184.
- 101) John A. Vasquez, "Reexamining the Steps to War," pp.377-378.
- 102) John A. Vasquez, *The War Puzzle*, pp.185-186.
- 103) *Ibid.*,p. 186.

- 104) *Ibid.*, p. 196.
- 105) *Ibid.*, p. 8.
- 106) Stanley H. Hoffmann, "International Relations: The Long Road to Theory," *World Politics*, Vol. 11, No. 3 (April 1959), p. 370.
- 107) ヴィジョンの一つとしてのグローバル・ガバナンスの民主化については以下を参照。田中宏明「グローバル市民社会とグローバル・デモクラシー—グローバル・ガバナンスの民主化について—」星野昭吉編『グローバル政治の原理と変容』テイハン、2014年、107-125 ページ。